図書館報 ビブリオテカー βιβλιοθήκη

「βιβλιοθήκη」はギリシャ語で図書館のことです。

第 43 号
2022年2月25日発行
北陸学院中学校・高等学校
図書委員会
〒920-8563 金沢市飛梅町1-10
TEL(076) 221-1944
印刷所 ハヤシ印刷紙工株式会社

Plus Reading 図書館をもっと利用しよう

私は北陸学院高等学校の図書委員長になり「plus Reading」を年間目標として活動してきました。本校では「勉強プラスもうひとつ」として、部活動やボランティアなどを行っており、私はそのもうひとつに読書をしてもらいたいと思いを込めました。しかし、年間目標に沿った企画を考えることはとても大変でした。中学校でも図書委員長をした経験はありましたが、高校では先生から指示を受けるのではなく、自分から積極的に行動しなければ手遅れであることを知りました。また、委員長一人で企画することは難しく、初めてのことばかりで不安でありながらも、各クラス委員や生徒会役員の協力、先生方の援助によって、なんとか行事を成功させることができました。

今年度、図書委員会での主な活動は「学級文庫」「おすすめの本」「POP講座」「ミッション祭」「選書会」でした。「POP講座」は2年ぶりの開催でしたが、今回初めて全国コンテストにも応募しました。私は、これらの活動の企画や準備など、様々なことを通して、たくさんの人と関わることの大切さに気づかされました。協力してくださった方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

行事の中で、私がもっとも心に残っているのは「ミッション祭」です。新型コロナウイルスの影響もあり、例年とは違った企画を工夫したりしました。担当委員による「おすすめの本」紹介、「POP講座」作品展示、「しおり作り」体験を行いました。私が予想していたよりも多くの人に展示を見に来てもらうことができて、とても達成感がありました。

図書委員長として活動してきたこの一年間を振り返ると、たくさんのことを経験することができて、とても充実した学校生活を送ることができたと実感しています。

（210H　岡田　のぞみ）

全国学校図書館 POPコンテスト

完成作品は力作がズラリ

「POP講座」参加者の作品は、例年以上の素晴らしい出来映えとなりました。講師の薦めもあり、初めてポプラ社主催の全国コンテストに応募しました。（講座報告は次頁）

図書委員おすすめの本

「図書委員おすすめの本」を発行し、皆さんにイチオシ本を読んでもらえるようにと展示も行いました。その中から、3名の推薦コメントを紹介します。

『モモ』

ミヒャエル・エンデ　岩波書店

この物語は、時間どろぼうと盗まれた時間を人間に取り返してくれた女の子モモのお話です。この本の魅力は、文中に心に響く名言がたくさんあることと、時間とは何かを問い、私たちに時間について考えさせてくれるところです。皆さんもこの本を読んで、自分の時間の使い方を考え直してみてはいかがでしょうか。

（109H　柳瀬　七海）

『はたらく細胞』

清水　茜　講談社

生物の授業で細胞について学んでいる時に、先生が「こんなマンガがあるよ」と紹介してくれた本です。「面白いマンガを読んで、それで勉強にもなるなら一石二鳥だ！」と思い、手に取ってみました。一人一人（一細胞一細胞？）にキャラがあって、読んでいて楽しいです。また、授業で習った以外のことも書いてあり、知識を増やすことができました。個人的にはマクロファージが好きです。皆さんもお気に入りの細胞を見つけてみてください。

（209H　澤田　祈幸）

『はたらく細胞』は、理化学研究所の「科学道100冊」プロジェクトにも選出されています。（図書館）

『海と陸をつなぐ進化論』

須藤　斎　講談社

私はこの本を読んで、微生物がもたらした進化と気候変動によって、世界が大きく変化した驚きの事実がわかりました。この世の生物が大きく変化した背景には、世界や生物に悪影響を与えた悲劇があったことなど、地球の歴史を知る良い機会になりました。この本は自然科学が好きな人にピッタリな内容です。特に海洋生物の話や、気候変動が地球環境に大きく関わっていることが分かるのでオススメです。

（301H　北橋　義伸）

新任司書から

司書
大音師　華子

北陸学院にご縁があり、4月より働いて一年が経とうとしています。まだ慣れない部分があり、皆さんに迷惑をかけているかもしれません…。

図書館には色々なジャンルの本があり、読んでみたい本がありました。一度も来たことがない人は足を運んでみてはいかがでしょうか。これからの人生で役に立つ情報や新しい発見があるかもしれません。これからも図書館をよろしくお願いします。

図書館報告

今年度は、生徒図書委員会や教職員と連携して、学校ぐるみで「読書活動の推進」に取り組みました。

〈授業利用〉

高校1年生が、物理基礎・生物基礎の探究型学習「サイエンスQuest！」で、「科学道100冊」シリーズを活用しています。

〈全国高等学校ビブリオバトル2021石川県大会〉11月21日(日)

学びの杜ののいちカレードで開催された大会に「サイエンスQuest！」で好成績を収めた代表が、本校から初めて出場しました。紹介したのは、河合江理子の『自分の小さな「鳥カゴ」から飛び立ちなさい』。本の魅力が伝わる堂々とした発表でした。

大会に挑戦した
107H　津幡　高裕さん
（後列の右から2番目）

〈読書スタンプラリー〉10月25日(月)～11月19日(金)

スタンプラリーは、秋の読書週間のイベントとして毎年恒例になりました。スタンプを集めた利用者のべ19人が、豪華景品をゲットしました。

〈テーマによる展示〉

4月　図書館へようこそ〈絵本〉
5月　気象について考えよう
6月　オリンピック
7月　「校内読書感想文コンクール」課題図書
9月　北陸学院136周年
10月　世界遺産
11月　考古学
12月　クリスマス絵本

〈先生おすすめの本〉

★松本　康子（社会科担当）
『アルケミスト』
パウロ・コエーリョ
『百年の孤独』
G・ガルシア＝マルケス
『天、共に在り』　中村　哲
『江戸川乱歩短篇集』江戸川乱歩
『赤頭巾ちゃん気をつけて』
庄司　薫
『小説の技巧』
デイヴィッド・ロッジ

図書館利用統計 4～12月

〈新規購入雑誌〉

『National Geographic Kids』
『National Geographic Partners』
やさしく理解しやすい英語で、色鮮やかな写真と共に、自然・科学・文化・歴史を紹介しています。

（司書　高井　章子）

〈個人貸出BEST5〉

★高校生

1位	301H	北中　元規	56冊
2位	107H	中戸　萌咲	35冊
3位	307H	宮本　彩名	33冊
4位	203H	宇谷　裕子	27冊
	309H	光谷　ま佑	27冊

★中学生

1位	1年	牛島　理津子	121冊
2位	1年	表　詩織	74冊
3位	2年	古屋　七花	62冊
4位	3年	上田　知弥	56冊
5位	3年	福井　里奈	45冊

〈貸出作品BEST3〉

1位	はたらく細胞	清水　茜
2位	はたらく細菌	吉田　はるゆき
3位	はたらかない細胞	杉本　萌

〈貸出作家BEST3〉

1位	東野　圭吾	2位 原田　マハ
3位	湊　かなえ	

貸出利用冊数	2019年度	2020年度	2021年度
高校1年	306	683	630
高校2年	297	275	263
高校3年	622	423	339
中学1年	578	131	298
中学2年	125	295	95
中学3年	13	103	250
教職員等	365	331	470
合計	2,306	2,241	2,345

先生から

皆さんは今年図書館を何回利用しましたか？本屋に何回行きましたか？本を何冊手に取りましたか？今年度の図書委員会の目標は「生徒の皆さんに図書館をもっと利用してもらう」でした。

勉強や部活動、ボランティア活動など忙しい毎日に追われている皆さんはなかなか本を手に取る時間を作るのは難しいのかもしれません。しかし、そんな忙しい毎日を送っている高校生の皆さんにこそ本を読み、心の休息をとって欲しいと思っています。いつかの記事にこんなことが書かれていました。「人がひらめくときはリラックスしている時である」。ついつい文字を嫌厭してしまう人、何も難しい本ばかりを読まなくてもいいのです。何となくタイトルに惹かれた、表紙が可愛かった、まあ、興味あるジャンルだった、そんなきっかけからまずは本を手に取ってみてください。そして好きな飲み物でもそばにおいてページをめくってみてください。きっとその瞬間心地よい空間が生まれるでしょう。もしかしたら悩みの糸口が見つかることもあるかもしれません。

何かを調べるために図書館を利用する、感想文を書かなければいけないから本を読む、きっかけとしてはどれもありですが、せっかくですから本をもっと好きになるために、自分の意志で好きな本を手に取ってもらいたいと思います。本はあなたに新しい世界を見せてくれます。視野を広げます。新しい発見を与えてくれます。時には価値観を揺るがします。そんな本と出会うため、図書館や本屋に足を向けてみてはいかがですか。世界は本があふれています。そしていつかあなたの「人生に影響を与えた本」に出会って欲しいと思います。

（高校図書委員会担当　下村　舞）

編集後記

今年度『図書館報』は、中学の記事も掲載しました。この一年間、委員会活動に協力してくれた皆さんに感謝します。今後も中学・高校ともに充実した委員会活動になりますように！

高校図書委員会
委員長　210H　岡田のぞみ
副委員長　210H　吉村　岳斗
209H　澤田　祈幸

POP講座

7月9日（金）

講座には、生徒17名が参加しました。講師の伴響さん（うつのみや書店）からは、完成作品のクオリティが高評価でした。

僕は「POP講座」に参加して、POPを作る楽しさを感じました。最初はなぜPOPが作られたのかを知らなかったけれど、POPが、それを見た人の心を動かしているのだと、講師の方から教わりました。

そして、実際にPOPを作りました。文字やキャッチコピーによって、見映えが変わり、本を読みたくなるのだと聞き、自分もいろいろ工夫しました。文字の工夫に一番苦労しましたが、自分でも驚くほどの素敵なPOPに仕上がり満足でした。

講座で作ったPOPは「おすすめの本」として、図書館に展示してあります。ぜひ見てください！

（106H　新谷　颯大）

僕はこの講座に参加して、POPに対する意識がガラッと変わりました。僕もPOPがきっかけで、興味の湧いた本を手にして購入することが多いので、たくさんの知識を得ることができて、とても嬉しく、楽しかったです。普段気にせず目にしているPOPには、読者を惹きつける工夫が一つや二つだけでなく、五つ以上もあることに驚きました。

実際にPOPを作って、人を惹きつけるために必要な色合いや、インパクトのある文字を書くのが大変でした。講師の伴さんのご指導もあり、納得のいくPOPができて、良い思い出になりました。

（202H　山﨑　翔生）

POPの基本を教わりました！

うつのみや書店の方に来ていただき、POPの作り方を教わりました。これまで本屋で、たくさんPOPを見る機会がありましたが、作ることは初めての経験でした。人を惹きつけるPOPを作るためには、人の心を掴むようなキャッチコピーや絵、色合いなどの工夫が必要でした。〝ドラマ化〟のような興味を持ってもらえるような言葉をつけたり、本のイメージに合った色を使ったりすることで、人の目に留まりやすい工夫をしました。

この講座で学んだ、情報を簡潔に分かりやすく伝える方法を日常生活でも使っていきたいです。

（308H　長谷川　愛）

ミッション祭

10月19日（火）
20日（水）

企画内容

「おすすめの本」紹介
「POP作品」展示
「しおり作り」体験

選書会

11月9日（火）

うつのみや書店で選書会を行いました。生徒有志が、図書館の蔵書にしたい本を選びました。

私は図書委員長に誘われて、選書会に参加しました。最近、読書をしていなかったので、久しぶりに本屋に行きました。本屋には小説や評論から絵本まで幅広い分野の本が並んでいて、とても興味をそそられました。本棚を探すと、知っている映画の原作や表紙がかわいい本があり、手に取ってみるだけでも楽しむことができました。その中でも、気になった宮崎駿の本を選びました。この本は読みやすいと思うので、読書が苦手の人にもお薦めの一冊です。

選書会に参加して、今まで読んだことのない多くの本と出会い、ぜひ読んでみたいと感じました。あまり本を読まない人も、本棚を見てまわることで、新しい本と出会えると思います。　（210H　池田　吏沙）

私はこの選書会で、久しぶりに本屋に行きました。普段はマンガや雑誌のコーナーばかりに行くので、特に小説を選ぶのは新鮮でした。本棚には映画やドラマ化された本から、政治の難しい本までいろいろありました。中でも、かわいらしく今風な絵の表紙が目に留まり、個人的にも買って読みたくなるほどでした。季節柄、クリスマス関連本がディスプレイされていて、子ども向けの絵本だけでなく、クリスマスの歴史が書かれた専門書も気になりました。

今回の選書会では、図書館の本を選ぶという貴重な体験ができて、とても楽しかったです。私の選んだ本が図書館に置かれ、誰かに読んでもらうことを想像するとワクワクします。

（210H　亀山　紗々）

購入図書リスト

『あかずの扉の鍵貸します』谷　瑞恵
『悪魔の辞典』　中村　徹
『あさひは失敗しない』　真下　みこと
『あたしとあなた』　谷川　俊太郎
『意味がわかると怖い4コマ』　湖西　晶
『うつとり、チョコレート』青木　奈緒他
『ヴィーナスは天使にあらず』　赤川　次郎
『おとずれナース』　のまり
『音楽と数学の交差』　桜井　進他
『きまぐれな夜食カフェ』古内　一絵
『ココ・シャネル女を磨く言葉』　高野　てるみ
『こころのナゾとき！心理テスト』　亜門　虹彦
『コーヒーと短編』　庄野　雄治
『三十六歌仙』　吉海　直人
『シュナの旅』　宮崎　駿
『ジブリアニメで哲学する』　小川　仁志
『図説クリスマス全史』　タラ・ムーア
『世界一やさしい超勉強法101』　原　マサヒコ
『退屈な日常を破壊する都市伝説』　灯野　リュウ
『第七官界彷徨』　尾崎　翠
『日常にひそむうつくしい数学』　冨島　佑允
『日本製』　三浦　春馬
『僕の姉ちゃん』　益田　ミリ
『ロヒンギャ難民100万人の衝撃』　中坪　央暁
『笑うマトリョーシカ』　早見　和真

もしもジョバンニが死んでしまったなら、両親は悲しむでしょう。どんなことがあっても人を悲しませてはならない、何より、両親より先に死んで悲しませることはあってはならないと、作者宮沢賢治は伝えたかったのではないかと感じました。そして、どんなに辛い境遇の中でも両親を悲しませることなく生き続けることが、ジョバンニにとっての「ほんたうのさいわひ」だったのではないかと考えました。

それではカムパネルラはどうだったのでしょう。彼は溺れたクラスメイトを自らの命と引き換えに助け、死にました。私には絶対にできないと思います。たとえ相手がどんなに良い人だったとしても、自分の命の方が大切だと考えるからです。しかしここでもう一度考えてしまうのが「ほんたうのさいわひ」とは何か、ということです。カムパネルラにとっては、自らを犠牲にしてクラスメイトを助けることこそが、「ほんたうのさいわひ」だったのではないかと思うのです。つまり、それぞれの置かれた状況によって「ほんたうのさいわひ」は異なり、正解は一つではないということです。

では、私にとっての「ほんたうのさいわひ」はなんでしょう。まだ私には気が付けていないように思います。日々出会う人たちと生きる生活が、それを求める旅なのかも知れません。

金沢市中学校読書感想文コンクール

優秀賞

中学3年　庭田　柚花

「向き合い、寄り添って」
～『with you』～

「ヤングケアラー」、本の帯に書かれたその言葉にふと目が留まった。どこかで聞いた言葉だった。最近、ニュース番組の特集で取り上げられていたような記憶があった。何となく言葉だけ覚えていたけれど、どういうことを指すのかと興味が湧き、私はこの本を手に取った。私と同じ中学3年生の少年が主人公だというところも関心を引いた。

その主人公が偶然出会った少女を通して、知らなかった世界を知り、自分の環境や自分の心の中と向き合い、受験にも挑み、新しい一歩を踏み出していく。主人公の悠人は、両親の不仲や優秀な兄と比べられることからの劣等感に悶々とする日々を送り、自分は必要とされていないんだという虚しさを抱えていた。そんな悠人が出会ったのが、朱音という中学2年生の少女だった。

朱音は、病気の母に代わり、小さい妹の世話や家事をし、母の看病もしている。父は単身赴任で不在の為誰かに頼ることもせず、友達にも打ち明けず、全てを一人で抱えて暮らしている。不安と孤独に押しつぶされそうになっていた。

私は、朱音の言葉が深く心に刺さった。「親は自分に興味がないから自分なんていないんだ。わたしがいなくていいんだ。」と言った悠人に対して、「わたしはいなくなんてなれないんだ。わたしがいなかったら、うちがこわれちゃうから。」と言った、その言葉だ。私は胸が締め付けられるような気持ちになった。不安で怖くて苦しいのに、自分で自分を必死で立ち上がらせている朱音の悲しさと強さが伝わってきた。悠人の「自分なんていなくてもいいんだ」という感情も、朱音の「わたしはいなくなれないんだ」という感情も、私は抱いたことのないものだ。この時、私は自分のいる環境について、改めて考えさせられた。両親も妹弟も健康で、仲が良く、皆いつも笑っている。私が生活の心配をしたことはなく、自分がやりたいと思うことをやらせてもらっている。きっと、それは当たり前のことではないのだ。

朱音のように家族の介護やケア、身の回りの世話をする十八歳未満の子どものことを、「ヤングケアラー」と言う。彼らにはその生活が「当たり前」で、自分自身が「ヤングケアラー」だという認識がないことも多いそうだ。令和3年4月の実態調査によると、世話をしている家族が「いる」中学2年生は5・7％（約十七人に一人）、全日制高校2年生では4・1％（約二十四人に一人）いるらしい。現在、中学の一クラスに一人か二人いるとも言われている。だが、本人たちには自分で認識がなく、周囲の人に言えないことから、実際にはもっとたくさんの「ヤングケアラー」がいると推測されている。

物語では、朱音が自分のことを悠人に話したことで、二人の距離も二人の近い未来も動き出していく。私は、二人がお互いを気遣いながら、思いやる距離感がとても好きだ。悠人は朱音と出会ったことで、ぎくしゃくしていた自分の家族とも、思っていることを話せるようになり、投げやりだった受験にも真剣に取り組み始める。朱音も悠人と出会い、悠人の母親にもきっかけをもらい、自分の心の声を外に出す勇気を持つ。その朱音が悠人に言った言葉が印象的だった。「だれにも知られたくないって思ってたの、ずっと。だけど悠人が知っていてくれて、そのことがやっぱりうれしかった。」誰にも話せなかった自分のことを悠人が知ってくれたことで、一人ではないと思えたのであろう。

物語ではヤングケアラーである朱音の状況は好転していたが、現実には、今も誰にも頼れず介護や家事に追われ、場合によっては自分が働いて家計を支えて、自分の学業や未来への希望を諦めてしまっている子ども達がいる。これから高齢社会がさらに進むことで、ヤングケアラーの問題もより深刻化すると言われている。この問題が社会にもっと広く知られ、さまざまな角度からのサポートが整備されるようになって欲しい。

悠人の言葉に大事なキーワードがあった。「子どもには親を選べない。それなのに、子どもの暮らしは親の状況に大きく左右されてしまう。」この問題について、私はこれからも関心を持ち続け、考え続けたい。そして同時に、私自身の今の環境にもっと感謝しなければいけないのだと思った。私が「当たり前」のように思い、過ごしている環境は、「当たり前」ではないのだと心に刻みたい。

悠人と朱音の新しい一歩に、爽やかな風が吹いた。一つ一つの家庭には問題があったとしても、周囲がそれを他人事とせずに、心を寄せて考えたからだ。子ども達誰もが胸を張って、未来に向かって歩ける世の中を作る、その努力の輪の中に、私もいたいと思う。

クラス図書を配架しています

中学2年　古屋　七花

私が学級文庫の本を選ぶときに心掛けたことは、本が苦手な人にも手に取ってもらえるような作品選びです。懐かしい絵本や、遊び心のある本、題名が少し個性的な本をセレクトしました。さらに授業に関連した古典や理科の本なども選びました。学級文庫に目を留めてみてください。

第45回 校内読書感想文コンクール

『生きるぼくら』

優秀賞

308H
艸田　一葉

ふりかけを掛けようとした手を止めて、私はまじまじとお米を見つめた。一粒一粒が白く輝いている。手の平にのせた茶碗から温もりが伝わってくる。今日は何も掛けずに食べてみよう。ふかふかのお米に箸を入れ、口に含む。ほんのりとした甘さが口の中に広がり、噛むほどに甘みが増す。いつもは気にしないお米農家の人達の顔が浮かぶ。今日、このお米が私の命の一部となったのだ。そして、私は「自然の力」の一部になるのだ。原田マハの著書『生きるぼくら』を読んだ次の日の朝の一杯のご飯。感謝で一杯だった。

この物語の主人公、麻生人生は、いじめにあい不登校を経験し、学校からも見放され、懸命な就職活動も虚しく、どの会社にも拒否されてしまった。そして四年の引きこもり生活を送るようになるのだが、頼みの綱の母にも家を出ていかれてしまう。人生の引きこもり生活はひどいもので、ぼさぼさの長髪頭に無精髭のあごのまま、ゴミの中でゲームをしたり、他人のブログに中傷コメントを書いたりして、眠る。ただ、そんな生活を送るほど、人生の過去の傷は大きかったのだ。頑張れば頑張るほど、自分を押し潰そうとする理不尽と出会うのである。そしておそらくほとんどの人が、人生の過去を知るまでは、人生を引きこもりとして見ているのだ。

問題というのは、どこにでも存在している。見えている問題を引っくり返せばまた問題、あるいはもっと遠く、深いところに存在しているかもしれない。私が中学生だった頃、友達が不登校になり、先生から「あの子を支えてあげて」や「何で不登校になったか知ってる?」と言われたことがあった。私も何も知らないまま、友達が学校に来ないことで落ち込んでいただけあって、その何気ない一言がとても重く、その友達を恨んでしまったことを覚えている。物語の中でも、一つの物事に対して、それぞれの登場人物は全く異なる苦悩をもち、そのことになかなか気づけない。この本を読んであの頃を思うと、不登校という問題一つとっても、不登校になった生徒だけが辛いのではない。その家族も友達も先生も、みんなで一つの問題に向き合っていたのだと思える。物語の中で、人生の祖母であるマーサばあちゃんの「私たち、繋がり合って生きているのよ」という言葉がある。私達は、生きるためにどうにかして人と繋がろうとする。しかし、本当はもう繋がり合っているのだ。私達に必要なのは、その手と手をしっかり握っていることなのではないか。

マーサばあちゃんを尋ねて行った蓼科で、人生はやがて米作りを通して人間が自然の一部であることを学んでいく。その中で、私の心に強く響いたのは、シンプルな「ありがとう」の一言だった。

マーサばあちゃんの田んぼは、普通のそれとは異なり、不耕起、無肥料、無農薬、害虫も駆除しない自然に近い方法でお米を作る。手間も時間もかかるぶん、人と自然の距離が縮まり、土や水や虫、太陽の光や風と一緒になって農作業をする。人生はまるで子どもを育てるようにお米を作り、人生自身も成長していく。私は、マーサばあちゃんの米作りに関わる人々のこのような自然との向き合い方に、不思議な温もりを感じた。私は「自然」と聞くと、まず人間のいない状態の山川草木の情景が浮かぶ。普段の生活の中で、自然は尊いものだとか、自然破壊が進んで動物が住みかを失っている話や自然災害のニュースなどを聞くうちに、私は自然に対してどこか近づき難く、人間はちっぽけな存在だと思うようになっていたことに気づかされた。この物語の中で、兼業農家をやっている田端さんが、「自然と、命と、自分たちと。みんな引っくるめて、生きるぼくら。」と言う。小さな存在だから、お互いに補い合い生きているのだ。お米はみんなで繋がって生まれた新しい命で、生きるぼくらを体現してくれているような気がする。そんなお米のある食卓につける今、私は「私」を形作る全ての人と自然に感謝の思いが湧き、お米が食卓にあるのなら、私も目の前にあることに精一杯取り組んでお返しがしたいと思う。この本の中で「ありがとう」の言葉は、感謝することの大切さというより、生きていたら口からぽろっとこぼれた言葉として描かれている。それ以上何も飾らずに、自然で単純な「ありがとう」もまた、人の心に生きるのである。

今、多くの人がどことなく悲観的に日々を送っているように思う。ずっと後ろ向きで進む田植えのように行っていくことは疲れるのに先が見えないものだ。しかしそこに人生たちは希望を見出し、お米を実らせるのだという前向きな気持ちで「後ろ向きに前向き」に作業を行った。私達は人間である前に生き物として、生きることをやめない力を持つことをこの本から学んだ。疲れている人の前に、命をつくる一杯のご飯があってほしい。私達は今日も、「生きるぼくら」だ。

校内読書感想文コンクール 審査結果

夏休みに本校高校生に読書感想文の宿題を課し、提出された作品をもとに「校内読書感想文コンクール」を実施しました。29クラス・計866点を審査した結果を報告いたします。

☆最優秀賞

『水を縫う』　202H　那谷　桃子

☆優秀賞

『52ヘルツのクジラたち』　106H　宮村　拓磨
『羊と鋼の森』　209H　苗代　結希
『生きるぼくら』308H　艸田　一葉

☆優良賞

『水を縫う』　110H　高村　遥
『科学者になりたい君へ』　102H　柳谷　冴子
『友だち幻想』　106H　飯島　実花
『ひと』　202H　谷内　葵

☆佳作

『兄の名は、ジェシカ』　108H　河合　春奈
『十九歳の地図』　210H　織田　彩菜
『羊と鋼の森』　309H　田上　陽菜
『水を縫う』　309H　池田　茉由

なお校内入賞作品のうち、柳谷さん、那谷さん（Ⅰ類・課題図書）、宮村さん、苗代さん、艸田さん（Ⅱ類・自由図書）の感想文は、石川県の「読書感想文コンクール」に、本校代表として選出され、那谷さんが最優秀賞（県代表）、宮村さんと艸田さんが優秀賞を受賞しました。

（国語科）

中学校図書委員会

図書委員会の活動を通して

中学2年　坂本　美晴

今年は、皆に本に興味を持ってもらい、少しでも読書をしてもらおうと、活動を始めました。読書会は初めての活動だったので、参加してくれる人がいるかどうか心配でしたが、各学年の図書委員をはじめ、たくさんの人が参加してくれて嬉しかったです。選書会では事前アンケートを取ったところ、多くの人に読みたい本があることが分かり、アンケートを取って良かったと思いました。

「読書通帳」を始めました

中学3年　石原　咲恵

私は、「景品がもらえるなんて、おもしろそう。」という軽い気持ちで、読書通帳に記入を始めました。早く貯めたかったので図書館で本を探すうちに、いくつものおもしろい本や好きな作家を、新しく見つけることができました。一冊貯まったとき、「私はこんなに、より本を好きになったのだな。」と実感しました。

「選書会」に行きました

中学3年　福井　里奈

私は初めて選書会に行きました。好きな本を自由に選べると聞いて、とても嬉しかったです。本屋さんにはたくさんの本が並んでいました。図書館にあったらいいなと思っていた本があったので、その本を選びました。それが図書館に入ると思うと心がわくわくしました。

参加生徒九名が数冊ずつ選び、数日後、本が図書館に入荷して、図書委員で陳列コーナーを作りました。友達がその本を手に取って読んでいるところを目にしたとき、自分が選んだ本が読まれていることが嬉しく、参加して良かった、と思いました。

「読書会」を二回開催しました

中学3年　相川　まりあ

第1回「狐フェスティバル」
第2回「黄色い目の魚」

読書会は、今年度新たに始めた取り組みで、堅苦しいイメージがありました。しかし、話し合いが始まると、始めは皆緊張していたものの、自身の体験と重ね合わせて話したり、互いの感想に共感し合ったりして、同じ本を読んで話す楽しさを感じました。2回目は本の内容が難しく、話し合いも活発にはならなかったのですが、それぞれに自由な意見があり、とても有意義な時間が過ごせました。また機会があれば参加したいですし、ぜひ皆さんにも参加していただきたいです。

校内読書感想文コンクール

最優秀賞

中学2年　堀井　瑠偉

「ほんたうのさいわひ」～『銀河鉄道の夜』～

「銀河鉄道」とはいったいなんだろう、タイトルを見た瞬間、それが私の頭に浮かんだことでした。私は吸い寄せられるようにこの『銀河鉄道の夜』を手に取りました。私はこの物語を、主人公「ジョバンニ」がその友人「カムパネルラ」と共に、銀河鉄道の中でさまざまな人たちと交流を重ねながら、自分にとっての「ほんたうのさいわひ」とは何かを考えていく物語だと考えました。

「ジョバンニ」は、漁師の父親とは長い間会えずにおり、また母親も病に伏していて、そのうえ学校でもクラスメイトからいじめられていました。ですから「ジョバンニ」は、自分には「さいわひ」など無い、と思っていたのではないかと思いました。しかし、数少ない友人「カムパネルラ」と銀河鉄道に乗って旅することで、初めてジョバンニは自分自身の「ほんたうのさいわひ」について考えたのではないかと思います。

とはいっても、読むにつれて、分からないことがますます多くなっていきました。それはこの「銀河鉄道」はいったいなんのためにあるのか、また「ほんたうのさいわひ」とはいったいどのようなことなのか、ということを、私自身が考え始めたからです。

実は物語を読む前、私は「銀河鉄道」は、主人公が友人と共に銀河を旅するためのただの乗り物のことだと考えていました。しかし、物語を読み進めるにつれ考えが変わりました。「銀河鉄道」は、実は普段私たちが生きている「地上」と「黄泉の世界」をつなぐ、死者しか乗れない「特別な乗り物」だったのではないか、ということです。このことを考え付いた時、私の頭にもう一つの疑問が生まれてきました。「なぜ主人公ジョバンニが銀河鉄道に乗ることができたのか」という疑問が。

ジョバンニと共に銀河鉄道で旅をした友人カムパネルラは、物語の最後に川で溺れて死んでいるのです。その他にも銀河鉄道の乗客は、皆、死んだことを示唆される記述があります。だから、彼らが黄泉の世界へとつながる銀河鉄道に乗車していることに矛盾はありません。それなのに、ジョバンニだけは死んでいないのです。

そこで、私はもう一度、この物語を始めから読み返してみることにしました。読み返してみて、なぜジョバンニが生きたまま銀河鉄道に乗ることができたのか、一つの考えが頭に浮かびました。ジョバンニのまわりを考えてみれば、父親にも会えず母親は病の床にあり、学校ではいじめられている、このような辛い境遇の中で「もうこれ以上生きていたくはない」、また「早く死んでしまいたい」、そうジョバンニは思っていたのではないでしょうか。つまり、ジョバンニが銀河鉄道に乗車できたのは、ジョバンニがすでに黄泉の世界への第一歩を踏み出し始めていた、ということなのではないかということです。しかしジョバンニは死にませんでした。私は仮に、あのまま二人が銀河鉄道の旅を続けていたとしたら、二人とも、黄泉の世界へ行ってしまっただろうと考えました。ではなぜ、ジョバンニだけが死ななかったのでしょうか。

二人は銀河鉄道の車内でたまたま乗り合わせたり、途中の駅で出会ったりした多くの人と交流を持ちます。その中で若く、独りぼっちではないのが、このジョバンニとカムパネルラなのです。黄泉の世界へ向かおうとするジョバンニですが、不幸な身の上ながら、父親も母親もいます。